

民俗博物館だより

Vol.36 No.1

2010. 3. 1



御供の準備 (シンカン祭り 2009.9.5 野本暉房氏撮影)

目 次

回想法の普及講座について	鹿谷 勲	1
回想法の実際	永田 操	3
老人と過去	岡田 夏憂	8
民俗公園だより 野鳥 -石尾さんの記録から-	川瀬 浩	10
民俗博物館研究紀要目録 (1~23号)		12
みんなく春夏秋冬 -平成20・21年度の活動他-		14

回想法の普及講座について

鹿谷 勲

回想法

平成19年から3回にわたり「なら民博の活用術」の一環として、回想法の普及講座を開催し、民具と福祉の関わりを受講者とともに考える機会を設けた。第1回は平成19年2月11日に「民具の力ー回想法とはー」、第2回は同年7月29日に「民具の力ー回想法とはⅡー」、そして第3回目の平成20年7月13日には総括の目的で、「回想法での民具の使い方」をテーマとした。

「回想法」とは一般にはまだ聞き慣れない言葉であるが、過去のことを思い出し懐かしむことで、脳を活性化させ、生き生きとした自分を取り戻し、認知症の治療や予防に役立てようとする心理療法である。1960年代に米国で研究が始められ、わが国では1980年代から実践研究が積み重ねられ、90年代半ば以降高齢者福祉の現場で積極的に取り入れられるようになった。従来高齢者の思い出話は、「老いの繰り言」「過去への逃避」と見なされがちであったが、その意味が肯定的に捉え直されたのである。

その体験

筆者は、平成18年1月に京都府亀岡市の亀岡市文化資料館で行われた体験講座や同年7月に大阪市立大学大学院生活科学研究科が大阪市立住まいのミュージアムで実施した研修会などに参加し、回想法を自ら体験してみた。高齢というにはまだまだ猶予があると思っていたものの、実際には回想法にかなり反応してしまった。例えば亀岡で、話題が鍋釜のことからたまたま年末の餅つきに及んで、昔に体験した餅つきが脳裏に甦り、当時の状況が次々に思い起こされ、精神的な高揚を覚え、自らの体験を人前で語りたくなる欲求を強く感じた。当民俗博物館には老人福祉施設からの来館も多く、展示場で日々さまざまな回想が行われているはずであるが、多くの民具を保有する博物館の今後のあり方を模索する意味も含めて、回想法に関心のある方々を対象に普及講座を企画した。

普及講座

第1回目は、30名余りの参加のもと、大和郡山市の老人福祉施設の現場で介護士を務めていた岡田夏憂さんにまず「お年寄りと過去」と題して体験をお話いただいた。入所者の大半は女性で、日々お年寄りと接しながらその話に耳を傾け、女の一生を考えさせられることや、それでもなお語れないことを抱えて暮らしているお年寄りの日々の姿をお話いただいた。

さらに当時亀岡市内の介護老人保健施設で健康運動指導士を務め、回想法の実践に取り組んできた永田操

さんを迎えて、回想法の実践が行われた。あらかじめテーマを決めて普通は1、2点の民具を選び、6～8名程度を対象に45分から50分ほどの時間で1回行うとしたうえで、初めにみんなで歌をうたい身体を動かし、気軽に話せる心身の条件作りをしたあと、炬燵やハッキンカイロなどを話題にして、永田さんは控えめながらも巧みなリードで、参加者から話を引き出していった。今は使われない暖房具の経験が次々と出てきた。

第2回

初回が冬の民具を対象として、館内講義室で行われたので、第2回は民俗公園内の民家で、扇風機や蚊帳など夏の民具を用意して実施した。暑い盛りで、参加者は13名であったが、介護に関わる人々や近くの老人施設からの参加もあり、夏の生活の記憶がいろいろと語られた。しかし暑い盛りの昼間の民家での開催はやや無理があった。

第3回

これまでの講座の総括として、民具の使い方をテーマに設定し、開催中の企画展「台所の民具」展のなかからカンテキ（七輪）やちゃぶ台や梅干し壺などの用具を選び、10人の参加を得て講義室で開催。今回も回想の体験を鮮やかに語る参加者がでた。ここで永田氏は、物についてはあらかじめ調べず、物の名前も言わずに、参加した人が体験したその頃に戻って、思いを巡らし、目を輝かせて語りこそが重要であると指摘された。さまざまな過去の事例や失敗例も挙げながら、回想法は聞き取り調査ではないこと、順番に聞くものではないこと、ひとつの民具が即座に人を触発し、過去を瞬時に再現させ、積極的な発言を促すものであることが語られ、重度の認知症の人が、梅干しを発見して喋った奇跡的な出来事が披露された。



第1回講座風景

その基本姿勢

民具を用いた回想法の実施は、民俗学と関係はあるものの、聞き取り調査ではないとし、その基本姿勢は①アイコンタクト②スキンシップ③スポットが重要であると永田さんは言う。スポットとは集団を見ながらも、

個人を忘れずに、それぞれにどれだけスポットライトを当てるかということ、またすべてを受容するのが基本姿勢で、否定は一切しないのが大切であるという。

参加者の意見

第1回目の参加者との意見交換では、回想のなかでも「つらい回想」の問題が何人もの人から指摘された。永田さんは、回想がつらいものにも及ぶとそれが不安行動につながるの、戦争の話などつらい思い出につながることは、できるだけ避けるとしたが、そのことが共感につながることもあるのではとする意見、さらにつらい経験を少しでも軽くするために、取ってつらいことを引き出す回想もありうるのではないかという意見も出た。

この他、参加者した方々からは様々な意見が出た。参加者はカウンセリングを学び実践経験のある人や、福祉の現場にいて学び活用したいという人や、一般の関心ある方々であった。幼児対象の遊戯療法をかつて学んだ人は、医療情報を伝える現在の仕事にも生かしたいし、将来の両親の介護にも役立てたいと述べ、回想法を施設で取り組むため、また施設の利用者との会話に役立てたいと具体的な考えをお持ちの人もいた。

その結果、回想法に接して、講師の方の話の仕方やあいづちの打ち方が勉強になったという人や、「とても楽しかったです。昔の事や幼い頃亡くなった父と過ごした時間がすーっと甦り、幸せな気持ちになれました！！これが回想法なのか！！と感激いたしました。」という感想や、「回想法の技術に関する意見交換があればと思いました。」という具体的な知識をさらに求める意見や「私達では昔の話をするのは、とても難しいので、懐かしいものを見せていただきながら、昔の話と一緒にしていただく、出張回想法なんてあればとてもうれしい。」とする施設に勤める人の意見も寄せられた。また「定期的に順を追って、回想法について理解できるように、あらゆるジャンルの人に積極的に知らせて欲しい。そのために博物館の資料をもっと提供して欲しい。」という意見もあった。

「実践報告等興味深い、『老い』『老人』の民俗誌的なまなざしが欠けているのではないかと。人の生死の民俗学的なアプローチがあって、初めて民俗学＝民具→老い→回想となるのではないかと。民俗学に精通した人が、介護ホーム等に出向き、実践する報告に興味がある。」と語る男性もいた。

さらに「民具を使つての回想法を少し違う角度からとらえると、未だ未知のメソッドなり効果が開発されるのではないかとこの可能性を感じた。たとえば、民具は良くも悪くもその時代に生きてきた人々の生活(五感)そのものを映し出して存在してきたものであるから、これらをそれぞれ個人の心(記憶)の『文化遺

産』として将来に引き継いで行くべきで、何ものかを、そこに見出すキッカケを与えることによって、単なる回想ではなくて、未来将来への文化の橋渡しに積極的に参画する意識が生まれてきて、現在の生活の再評価、再認識につながるのではないかと考える。いわば、『回想』から『開想』へ、という大テーマがそこに設定できるのではないかと。しかもそれが、『民俗博物館』という民具を具備している機関において、そういうメソッドが開発されれば、その意義もいっそう大きなものになるであろう。」「博物館は過去の文化財の単なる集積と展示の場所と思われがちであるが、民俗映像上映会や今日のような試みは博物館が本来、知的活動の再吟味、再評価の場所であることを証左してくれるもので、これからの貴館の新しい試みの挑戦を心待ちにしているし、心から応援したい。」と評価して下さる方もいた。

今後の課題

講師の永田操さんの、目の前で実践と語りは、参加者のみならず、博物館側のものにとってもさまざまな問題を気づかせることとなった。

まず、博物館が収集してきた民具についてである。当館は、すでに4万2千点あまりを超える民具を収集保管し、もはや収蔵庫は新たな収蔵の余地がなくなっているが、近代的な生活資料についてはまだまだ不十分である。回想法に対応し、老人福祉に民具を役立たせるためには、昭和の生活用具も系統的に収集する必要がある。つまり、さらに将来の回想に対応するためには、平成の生活用具も収集の視野に入れなければならないということになる。民俗博物館における民具の概念の再検討も課題となってくる。

また回想法の実施は、福祉施設でのグループ療法として実施する場合と、博物館の展示を個別または集団で見られる場合が考えられる。前者の場合は、資料の貸出しが行われるが、その際民具を、「活用する民具」と「保存する民具」に分けて、活用を促進することも可能であろう。民具を社会で活用するために、活用民具としてさらに民具を収集することも課題となってくる。後者の場合は、個別的なさまざまな回想を想定しながら、その視点に立った展示空間の再構成をすることも課題となる。もちろん博物館は、回想のためだけにあるのではないから、別途回想専用の施設や空間を設けるという考え方もあるであろう。

いずれにせよ、民具を用いた回想法は、民俗博物館が今生きる人々と、また地域社会とどのようにつながることができるのかという課題に応える方法の一つでもあり、博物館の将来像とも関わって今後もさらに議論と実践を継続していく必要がある。

(当館学芸課主幹)

回想法の実際

永田 操

はじめに

私は京都府亀岡市の某老人保健施設において、平成15年から20年3月まで、集団療法の一つとして回想法を実践してまいりました。対象者は、認知症・失語症・依存症・神経症とさまざまな疾患をお持ちの方です。しかも、他の利用者との交流下手か、難聴か、コミュニケーションをとらない。このままでは、孤立状態となり、精神不安定状態に陥る可能性のある人にも声を掛け、コミュニケーションワークとして参加を促してきました。故に私の回想法は療法とコミュニケーションワークとの両面におけるメンタルコミュニケーションワークと申し上げておきましょう。

それで私が実践してきたなかでも最も印象的かつ民具の有用性を感じた事例を報告致します。この報告で、民具の重要性を実感され、今後回想法を実践しようと思われる方々の参考になれば幸いです。

回想法

回想法は、1960年アメリカの老年精神科医ロバート・バトラー氏が、高齢者の豊かな回想を見直そうと提唱したことが始まりで、日本でも90年代半ばから、高齢者福祉の現場で取り入れられ始めたようです。

私と回想法の出会い、平成15年12月に、愛知県師勝町（現北名古屋市）から回想法キットを施設長が借りられ、実践を私に委ねたことから始まります。実践の際、施設の御利用者は、目が輝き、活気ある言動が生まれ、私の予想をはるかに上回る素晴らしい反応でした。その時、私は回想法が御利用者の活性化を図れるものと確信しました。結果報告をすると、施設長や管理部長ほか多数の方々のご尽力くださり、亀岡市文化資料館の館長様のご協力も得て、平成16年2月から、資料館所蔵民具を貸し出してくださることになり、回想法を実施させていただくことになりました。回想法の実施を通じて、失語症のご利用者の言語が明瞭になり、自発的言動も多くなってきたとか、うつ症状の方に参加意欲がでて、表情も穏和になられたとか、食事を召し上がったことをすぐ忘れてしまわれる認知症の方が、昔の記憶を鮮明に多弁に語られるとか、重度の認知症の方が、用具に反応された瞬間だけでもコミュニケーションが可能になったとか、効果は語り尽くせ

ません。高齢者は、加齢とともに、身体レベル、認知レベルが低下するのは当然と理解しながらも、まったくコミュニケーションが取れなくなってしまった御利用者を目の当たりにすると、ショックを隠せないのも事実です。

多くの高齢者と向き合い、その人自身が生きる力を回復させる援助がいかに大切で難しいものであるかを痛感しています。ともあれ、傾眠、無表情、無反応な方が、回想法に参加されることで、少しでも活性化され、笑顔で言動されることは明確です。

亀岡市文化資料館での実践講座

京都府の亀岡市文化資料館で特別展「タイムスリップ・回想法の扉」（平成17年12月10日から平成18年1月29日）が催され、平成18年1月22日には回想法の実践講座を受け持つことになりました。参加者は60名ほどいらっしゃったのでしょうか。他府県の博物館関係者、施設関係者、大学生、議員の方々大変バラエティーに富んだ参加者の中で、させていただきました。実践後の意見交換が実践時間よりも上回り、いかに興味深く関心を持たれ、この場におられるかが窺えました。その後参加された福岡県筑紫野市の歴史博物館の方は、行政と連携を取り、市の健康増進課が介護予防事業として回想法を推し進めておられると聞きました。また亀岡市文化資料館からは、京都府内の施設からも民具を借りに来られるとお聞きし、講座での実践が反響を呼んだことをうれしく思っております。



永田操氏（右手前）

なら民博の普及講座

さらに亀岡での講座に参加されていた奈良県立民俗博物館の鹿谷様から、普及講座として回想法の実践講

座の依頼があり、お受けすることになりました。

しかし、初めてその場に居合わせた方々で、年齢もさまざま、名前も分からずましてやお元気な方々。無理無理無理！と心に呟きながら、民具の力、民具の素晴らしさを感じていただきたいと思う一心で、平成19年2月11日、同年7月29日、さらに翌年の7月13日と三度にわたり普及講座を担当させていただきました。

一回目の講座の意見交換時、「つらい回想」の意見が浮上し、「つらい経験を少しでも軽くするために、あえてつらいことを引き出すことも必要では？」とのご意見をいただきました。しかし、私はカウンセリングをしている訳ではなく、言動しないことでますます認知症が進行するなかでの認知遅延、また集中していただくことで徘徊行動の軽減、生活意欲、不安行動の安定などを目的に回想法をさせていただいております。

ある時のセッションで、新婚当時の話となり、お一人の方が声を荒げて「思い出したくない！」と言動され、タオルで顔を被われました。回りの雰囲気は一変し、即座に話題を変えたことがあります。つらい回想を引き出すことも療法の一つかも知れませんが、周囲の参加者のリスクを考えると、あえてつらい思い出を引き出すことは避けたいと思います。



参加者で歌を歌う

在宅介護と回想法

二回目の講座では、「これから在宅介護がますます増えてくるなか、在宅での回想法も必要では？」とお言葉を頂き、多いに共感しました。私の母も79歳で、母との会話が幼い頃、私が生まれる以前の話を話す機会が増えたことは確かです。回想法に出会えていなかったら、母との会話も私主体型の談話で終わっていたと思います。回想法には感謝です。

回想法は家族とのコミュニケーションを担い、そこに民具が生かされれば、より五感が刺激され、生きがいへとつながり、在宅での介護軽減につながっていくものと信じたいところです。民具の活用法の一つに回想法があるといっても過言ではないでしょう。また民具は回想法とのジョイントで、共存共栄の関係になりえるものと思います。そしてますます回想法が世に反映されることを願っております。



民家で第2回講座風景

いろいろな民具の活用法

三回目の普及講座では、これまでの総括として、具体的な民具の使い方がテーマとなりました。

夏でしたので、次の夏の民具を用いました。
さかえ重・七輪・誘蛾灯・こんつき・たらい・洗濯板・洗面器・扇風機・水中ポンプ・下駄・すり鉢とすりこ木・ザル・風鈴・ぶた蚊取りと線香・団扇・いかき・ちゃぶ台・蠅帳・蓄音機とレコード・枡と枡かけ・たらいと梅干し

上記のなかで、民博の企画展「台所の民具展」に展示されている民具を数点抜粋してお話したいと思います。

①七輪

これは地域によって違いますが、ほとんどの人はコンロと言われます。形は丸形と角形があったようですが、大阪出身の参加者で「カンテキ割ってすり鉢割って…」と歌い出された方もいました。この七輪を出すだけで、ちゃぶ台・すき焼き・うちわ・火消し壺と話題が膨らみ、七輪をどこに置いてあったかで、台所の様子まで窺い知ることができます。台所から家の間取りまで何うことも可能でしょう。しかし、リードする者が「テーマ」を念頭に置いて話を進めないと、単なる聞き取り調査で終わりがねないし、軌道修正が困

難になります。もしテーマから外れたとしても、参加者全員が共に過去を振り返りその時の様子を楽しく語っていただけたかどうかが大変重要になります。今回の「七輪」からすき焼きは当然話題になることを予測し、「子供の頃のご馳走」と決めたのです。案の定、すき焼きの話で盛り上がり、普段の食事よりご馳走は忘れられない記憶なの分かります。参加者の一人が、「寄り合いにはすき焼きをよくしたよ」話され、私が「どんな寄り合い？」と伺ったものですから、講の話が浮上してしまいました。伊勢講・大原講・頼母子講・愛宕講・妙見講・燈明講・行者講と出るわ出るわ！行事をこなすだけで大変だろうと思いつくと、「昔はこんな楽しみしかなかったんだよ。米を少しずつ集めて、当番の家で寄り合うんや」と言われるのです。「大原講」は「綾部の奥に大原神社があって、百姓の神様、みんなで参るんや」とお一人が言動されると「田植えは大変や！ 早乙女さんに来てもうてな」と言われたのです。何じゃそれ？と思いつつ、私は身を乗り出してテーマをそっちのけで聞いてしまいました。泊まり込みで田植えを手伝ってくれる人のことで、お金を払います。仕事ぶりが悪いと返されるし、怒られたエピソードまで話は及びました。ご馳走はすき焼きのみで、テーマから外れてしまいましたが、「講」という一つの話題で、参加者全員が盛り上がり、楽しく語っていただけたのであれば、これもあり！かと思つた次第です。私自身もたいへん勉強になり、意外な展開となったセッションです。

②ちゃぶ台と蠅帳

参加者は即座に「夏」をイメージされます。そこに蠅取りリボンでも用意すればより話題の幅が広がり、盛り上がるでしょう。ただし注意したいことは、参加



第3回講座風景

者個々にインパクトのある用具のことを語り出されるため、話題が絞れず、過去と同じステージに立ってもらうのに時間がかかってしまいます。用具の説明だけで終わらせてもらいたくないため、テーマを決めて挑んでいただきたいです。私は「昔の害虫駆除」と心に決め始めました。90代前半の女性が、「はえとりリボンはずっと後や！はえとり紙が先やで」と言動されたため、タイムスリップする絶好のチャンスを得ることができたのです。「はえとり紙はオクドサンのところに広げておくで」とか「ちゃぶ台に置いたで」「歩いて踏んでお母さんに怒られた」と言動は続きます。箱膳に小さなハエたたきが1つずつあったとか、ハエとりリボンにイリコを付けとくとたくさん寄ってきたとか鮮明にその頃の話を語って下さいます。参加者の一人が「女中さんがハウサンダンゴをころがしていたな」と言われたのがとても印象的で、「女中さん」「ころがす」の言葉が今はほとんど耳にしないうえ、大変印象的でした。

ちゃぶ台だけでも十分実践は可能です。そして四季を明確にするスパイスがあれば、よりテーマに近づけるでしょうし、一体感を形成する近道となるでしょう。たとえば、ちゃぶ台とイカキを用意すれば、「夏の食卓」をテーマにできますし、オヤツまで話を展開すれば、お母さんの話を伺えます。ちゃぶ台と茶碗数客用意すれば、「兄弟（姉妹）の役割」をテーマにし、子供の頃の自分の位置を振り返っていただくことも可能だと思います。また夫婦茶碗を並べれば「新婚時代」を振り返っていただくこともできるでしょう。ただし、注意したいのは参加者全員が既婚者かどうか事前の調査が必要です。

③さかえ重（ななつ入れ）

用具が何か分からない私はテーマが決まらず実践した事例です。70代前半のK氏が「箱膳や！」、すると「いや違うさかえ重や」と90代前半のW氏。このW氏は毎回言動の少ない人で、「私は貧乏やったから知らん」とそっけない返答で終わることが多いのです。しかし、今回は違いました。間違ってる！と思う気持ちが、言動となって爆発したのでしょうか。それを一層証明したいのか「私が若い時、使ったし、赤飯も入れるし、煮しめも入れたで！」と言動は続きます。60代後半のH氏は「母の里は農家でそこで見たことがあります。大勢の人が集まった時に使っていたと思います」と言われると、そのW氏は「さなぶりの時にそれ

に料理を入れて持ち帰るんや」とH氏の言動に重ねました。さなぶりとは、田植えが終わってほっと一段落したときに、集落が寄り合う会食のことと、W氏は説明されました。参加者はW氏の言動に耳を傾け、私も含め全員生徒の立場に置かれていました。

年齢もさまざま、男女混合の参加者にこんな古い民具が使えるのかと不安を持ちながらも、「これは何?」と思う興味の方が勝ってしまって始めたセッションですが、W氏の活性を促すことができ、いい雰囲気の中進みました。

その後当然参加者全員から言動の引き出しを図るため、寄り合いについて、皆さんから声を頂くことにしたのです。京都の町育ちの70代前半のM氏が「足洗い」で集まったと言われたのです。足洗いとはお葬式のあとの接待のことだそうです。これもさかえ重からサナブリを通して足洗いまで及んだ意外な展開となったセッションです。悪条件と思ってもまずは実践です。案内人のスキルアップにつながる何かが絶対生まれるはずです。

④一斗マス・一升マス・マスカケ棒とわらざうり

わらざうりはたまたま参加者の一人が持ち込まれたもので、皆に見てもらおうと家から持参したと言われるのです。参加者の前に、マスとマスカケ棒を提示してしまっただけのことで、用具を隠すに隠せず、わらざうりに触れないわけにもいかず、困惑しながら始めました。何か接点はないものかとヒントを見つけようと進めるのですが、見い出せず結局時間切れとなりました。参加者からはマスとマスカケ棒の用途とわらざうりの作り方を伺うだけのセッションでした。この状態は私にとっては回想法ではないのです。過去を振り返って、思い出話へと到達しないまま終了してしまったわけで、不完全燃焼状態でした。民具は過去へタイムスリップするための手段であり、主役ではないのです。故に民具の選択は、どれほど重要であるかを感じていただけたと思います。

⑤タライと梅干し

平成19年7月初旬、「梅雨時の洗濯」をテーマにしました。このセッションは回想法の頂点のように思い、報告させていただきたいと思います。現在重度アルツハイマー型認知症の70代後半のI氏が参加したものです。重度になるとほとんどコミュニケーションがとれません。言動も意味不明で自ら発話が困難な状態となります。入所当時から重度であったわけではなく、

徐々に進行されたのです。

施設医師がI氏の実践評価をご覧になり、これ以上参加させても効果なしと判断され、参加ストップの指示を出されたのです。しかし、私はI氏に少しでも刺激導入になればと、参加していただいたのです。ここで奇跡が起きました。ある参加者は用具「タライ」から、「嫁入り道具の一つや」の言葉で、その頃にタイムスリップでき、洗濯の話が展開します。あいにくI氏は「草、草」と意味不明な言動でした。それから私は、見当識を促すつもりで、梅雨時の洗濯談義を期待して、梅干しを提示したのです。それを見るやいなや、I氏は立ち上がり、「梅干し」と言われたのです。そのピンを自分の傍らに寄せ、フタを開けようと力を込めて回されたのです。フタを開ける方向さえ、今は理解できない状態です。しかし、フタは見事に開きました。I氏は笑顔で「美味しいでっせ、皆食べてや!」と隣の参加者にピンを回そうとされたのです。今までのI氏とはまったく違った光景を目にして、私や職員は、刺激が入った喜びと感動で、目頭が熱くなりました。そして、I氏は参加者に「塩とシソやな」と話しかけているのです。I氏にとって、梅干しはよほどなじみの深いものであったのでしょう。瞬間とはいえ、重度の人がここまで活性できた例は少ないと思います。民具の力でしょう! テーマからそれてしまったわけですが、皆さん笑顔で梅干し談義に花を咲かせて楽しい時間を過ごさせていただき、I氏の活性も見られた忘れられないセッションです。

終わりに

回想法は四角四面にはめ込む実践ではなく、民具を通して過去に戻り、楽しく語っていただくことです。ただし、どこまで戻るかは、リーダーの采配にあると思います。そして、目的をとらえ、テーマを念頭に進めるなかで、今何が重要であるかを感じ、テーマから外れたとしても、瞬時に方向を見出していきたいと思っています。そうして実践に挑んでも、何が起こるか解らない未知の世界であることも確かで、大変魅力あるものだと思います。熊本大学の岩崎先生は、『福祉のための民俗学』(岩崎竹彦編 慶友社2008)で「祖先から行為と言語で伝えられた『民間伝承』の持つ力は大きい」、また「回期的変動する表層文化と日常生活をよりよくするために築き上げてきた基層文化が混在する。そして、その文化と共に高齢者の豊富な人生

体験がある」と述べておられます。実際私は、5年間を通じて同じ民具を繰り返し使用し、実践してきましたが、全てが新鮮で、参加者から数多くの文化を学ばせてもらい、参加者の人生に触れさせてもらいました。今後回想法を実践したい、しようと思う方は、ぜひ実現させていただきたいと思います。80代90代の高齢の方々に社会との関わりの中で、活力、やりがい、生きがいを持っていただける一つの手段として、回想法を実践させていただきたいと思います。

今、私は職場を離れ、高齢者福祉の観点から地域の「ふれあいサロン」での関わり、包括支援センター、保健センター、児童民生委員の方々との関わりの中で、活動させていただいております。ただ以前ほど回想法の実践がないのが現状です。いざ、外を向くと回想法が周知されていないことに驚かされます。今回の回想法講座に参加した友人がくれたコメントを紹介したいと思います。「最初参加者は、どこのだれか分からない人達を前に無口だったのが、徐々に講座の渦に吸い込まれるように、柔和な表情と歓喜で会話が始まり、昔からの知り合いのように、『これ知ってる』『知らない』『どう使うの?』と語り合いが生まれていき、不思議な空間でした。(彼女自身も幼少の頃を思い出し、頭の中を巡ったそうです。)この回想法が、高齢者の生活や認知症ケアのあり方を解決していく糸口になるのではと思います。また、私も感じるように、高齢者も人と人との関わりの中で、「生きる力」「望む暮らし」が実現できると思います。」と以上の感想を述べてくれました。

回想法は民具・用具でより効果を発揮することは明白です。まだまだ、一般の方々に周知されていない現状で、その効果を言葉や文章で分かっただきにくいのも確かです。実体験こそが重要で、理解が深まるものと確信しております。奈良県立民俗博物館では、民具の重要性を十分に理解されての講座依頼でしたので、プレッシャーはあったものの、大変やりがいがありました。今後私のすべきことは、一般(施設職員を含む)の方々への実践でしょうか。回想法の理解者を増やしてこそ、回想法が生きて、高齢者がより社会との関わりを持って生活していただけたらと思います。今後は私なりにできることを意識して活動していきたいと思っております。

(健康運動指導士・集団療法実践アドバイザー)



第3回使用民具

[表紙解説]

天理市海知町の倭恩知神社のシンカン祭り(9月の第1金曜日から日曜日)では、3種の神饌が登場する。一番下に「担い餅」、その上に小餅を杉皮の上に貼り付けた「花御供」(杉皮御供)を置き、さらに栗・桃・茗荷・棗・梨・蜜柑・柿を竹串に挿した「七色の御供」が作られている。



シンカン祭り

(2009, 9, 4 野本暉房氏撮影)



シンカン祭り

(2009, 9, 5 野本暉房氏撮影)

老人と過去

岡田夏憂

初めまして、介護福祉士の岡田夏憂と申します。今回は「お年寄りと過去」というテーマでお話しさせていただくのですが、はて、何をいったい話せばよいのかといまも悩んでいるところです。うちの施設では、回想法なるものは取り上げていませんから、今日は勉強のつもりでやってきました。よろしくお願いします。

私は、介護の仕事についてかれこれ12年になります。何年働いているのかということと話すと、だいたい年齢がわかってしまうので言いたくないのですが、言わないと余り説得力がないので、しかたなくいつも言うことにしています。18歳からはじめても30歳ということになりますね。で、私は3年ほど前から、奈良新聞に月2回「おばあちゃんにキス」というエッセイを掲載させていただいています。介護福祉士から見たおばあちゃん達の日常というのがテーマなのですが、施設のことを書くともあまりよろしくないみたいなので、できるだけ素材を外に向けることにしています。これはけっこう骨が折れます。でも連載を始めてから、お年寄りをとてもよく観察するようになりました。

私が勤務している施設では、入所者の80パーセントが女性です。ですから、女性はますます強く、男性はいつも小さくなっているような感じを受けます。女性の最年長者は94歳だったでしょうか。施設で働いていると、ことある毎に「あんたみたいな若い子に、そんなこと言われたくないわ。」というお叱りを受けます。近頃は私も強くなって、「私、全然若くないですから。あなたが年を取りすぎているんでしょ！」などと喧嘩が出来るようになりました。この仕事を始めた頃は、こう言われてはよく泣いたものですが、月日とは恐ろしいものです。

夜勤中やお昼休み、ちょっとした時間を見つけては、おばあちゃん達の昔話に耳を傾けるのは、とても楽しい仕事のひとつです。「今まで生きてきて、いつ頃が一番楽しくて幸せだった？」とよく質問します。するとたいがい、「戦争中で物がなかったけど」と前置きをして、「結婚するまでの、娘時代が一番幸せやった」と答えが返ってきます。「結婚してからは地獄やったなあ」などと目を細めて昔を思い出されます。「あんた、結婚なんかしなや」と付け加えられたら、「へへ、地獄かあ」と笑って返せない何かがあります。

だからでしょうか、結婚、出産という話題には過剰なほど敏感でさまざまな話が飛び出します。結婚してから満州へ渡った人でも、帰国する時期が悪かった人

は、スッカラカンになって日本に戻ってきたと言う話。「主人がね～」と上がり調子に夫のことを語る人と、「ダンナがな～」と夫の悪口もセットで満州での生活を語る人。このふたりはとても対照的で、女の一生を考えるうえで、やっぱり結婚はギャンブルみたいなものだなあと考えさせられたりします。

また、お産のことについても「子供を産む機械みたいに、10人もボコボコ産まされて、お腹が休まる暇もなかった」と今話題の発言を早くから口にしていたおばあちゃんがいたりして、話は尽きません。ただ言えることは、私達からすれば計り知れないほど複雑な出生の事情があったということ。それらを乗り越えて、おばあちゃん達が元気で笑っておられること。いろんな出来事も全部水に流せる強さがあるから女性は長く生きられるのかも知れません。私ごときが喧嘩しても勝てる相手ではないのです。

でも、お嫁入りの時の写真や子供の写真、時々眺めては何を思っているのでしょうか。たぶん、語られない事が真実なのでしょうね。

また、認知症をお持ちの方などは、夕方になると夜間譫妄せんもうが出てきて、とても混乱されてしまいます。あるアルツハイマー型の認知症をお持ちのおばあちゃんは、外が暗くなってくると洗面器とタオル・着替えを持ってきて、お風呂に行きたいから両替をしてほしいと訴えてきます。あまりきついことを言って刺激してはいけないので、今日はお風呂屋さん臨時休業らしいよ。といて、部屋に戻っていただきます。「なんで急に休むねんなあ」などとボソボソ言いながら、帰って行かれるのですが、「今度お風呂屋さん文句言っとくわ、ごめん」と返すと「言わなくていいよ」とおっしゃいます。この方のご主人は若い頃、潜水夫だったらしく、「だんなさん、今日はどこの海、もぐってはるの?」とか、「どこの川、もぐったの?」と聞くといろいろな地名を出してきて、川に橋を架けるから潜水夫が必要なんだとか、詳しく話して下さいます。



第1回講演風景

自分は潜っていったんさんを引っ張り上げる役目とか、だれそれが空気ポンプで送る役目だと話して下さい。紡績工場で自分がしていた仕事もアクションをつけて教えて下さいます。ふだんは「何か、わからんようになってきた。私、いつからこんなポーッとするようになったんかなあ」と不安を訴えてばかりいらっしやるのですが。

それから94歳になるおばあちゃんは、夕方になると「ちょっとあんた、火の番しとって」と言いに来られます。「鍋に火をかけているから見といて」というのです。自分は用事があるから「頼んだよ」と詰所のカウンターに言いに来られます。「おかず何？」と質問すると、「イカと大根炊いてるから」と具体的におっしゃるのがとても面白くて、「あぶないから火を止めとくわ」と火を止めに行く振りをします。「はいはい、ありがとう」と納得されます。

そして習慣とは恐ろしいなと思うことがあって、大宇陀から16歳で出てきて、猿沢の池のそばの玉突き屋さんで働いたのを始まりに、ずっといろいろな町で水商売をしてきたというおばあちゃんがいらっしやいます。嘘みたいなのですが、昼間はじっと静かに生活しておられるのですが、夕食を終え一段落してくると、詰所のカウンター席に坐って、そのおばあちゃんが、カウンターの向こうから話しかけるので、グラスでも置けば、まるで飲み屋さんようになってしまいます。二人が席に着いたら、ちゃんと二人に気を遣いながらまんべんなく愛想を振りまいて話を続けます。「昼間はあんなに静かなのに、どうして夜になったら元気になるの？」と聞いたことがあります。目もらんらんというより、いきいきとしてきます。「やっぱり夜になると調子出えへん。昼間からこんな調子でしゃべっても気分が出えへんがな」と愛想よくおっしゃいます。

お客さんの引っぱり方から、恋愛について語り始めるともう止まりません。コップに水を入れて「まあ一杯のみよ。」とさし出すと、うれしそうに「いただきます」と本当の飲み屋さんのママみたいな振りをします。「あんたな、男なんて信じたらあかんよ、金づる。私なんかはじめから、そう思って仕事してるよ。『あかんわ、このごろ。儲かれへんし』とちょっと甘い声出したら、ジャンジャンつかうからなあ、あほやなあ。だから、こんな水商売してきたら、かたい仕事は、バカらしくてできない」といつもおっしゃいます。

この方がすごいのは、本当に昼間は何もせず、職員の手指示で動くといった生活なのです。洗濯も自分で出来ないし、外出も一人で出来ないような方なのです。過去の記憶というのでしょうか、習慣というのはい

いなと思います。だからできるかぎり、時間があればこの方達の話をついじり聞くことにしています。そして、「違うよ」と言うのではなく、聞き手である私達もちゃんとその話の中の世界に入り込んで、演じてさしあげることは、とても大切なことだと思います。お風呂屋に行こうとしている方に、「お風呂屋なんていつも行ってないでしょ」と頭ごなしに言わない。

ちゃんと話にあわせていくというのが、この方たちとのつきあい方なんだと、話を聞き、引き出していく努力をしています。先の飲み屋のママさんをしていたおばあちゃんには、親身に話を聞き過ぎて、「そんなに興味あったら働か、紹介したるわ。あんたやったら、これくらいで売れるわ。」と値段まで付けられてしまったという落ちまでついています。

それから高齢になると、よく骨折されて入院している間に、認知症が進むケースがあります。90代の方ですが、転倒して大腿部を骨折されて、2か月ほど入院しているあいだに、やはりポーッとすることが多くなり、施設に戻ってからも、なかなか歩く訓練をして下さらなくて、心配していました。けれど、なにかのはずみで、その方がお好み焼き屋さんを営んでいたという話が出て、私達はお客さんになった振りをして、いろいろな話を引き出していきました。そしてある日、たまたま私が行った愛知県の大須の町の話をしました。「あんた大須知ってるの、行きたいなあ。まだにぎやかやろか」とうれしそうに話されます。「何買った？何食べた？大須観音にもお参りしたいなあ」と何度も何度もおっしゃいます。「今度行くときは連れて行ってや」「おばあさん、何買うの？」「うーん、カバンかな」「じゃあ、何食べたい？」と聞くと「おでんかなあ」などと話が盛りあがります。それからです。「がんばって歩く練習して、大須へ行こうな」と励ますと、訓練をして下さるようになりました。「行きたいなあ」と毎日のように言いながら、押し車を押して、歩く練習をされ、だいぶしっかり足が出るようになりました。

過去にすぎるのではなく、その方をよく知るために、昔語りをしてもらおう。前向きな活動のために、過去を用いるというのは、とても大切なことだと身をもって体験しました。いかに過去を振り返ることが、脳の活性化につながっているかを知ることができます。今回は回想法をしっかり学んでいって、施設の仕事に役立っていければいいなと思っています。

つたない話を最後まで聞いて下さり、ほんとうにありがとうございました。

(2007, 2, 11の講演要旨)



民俗公園だより 野鳥

—石尾さんの記録から—
川瀬 浩



民俗公園の野鳥については、大和郡山市内に住む石尾泰三・由紀子ご夫妻が、1998年1月から今日までかかさず調査している記録があるので、ご夫妻の了解を得て、それを元にして述べていきたい。調査は一月に1回、早朝から民俗公園の外周園路(約2km)をゆっくり歩いて、園路を中心とした幅50mにわたって観察されるすべての野鳥を記録するという方法をとっている。

観察された種類や数を述べる前に、まず参考までに、日本国内で観察された野鳥の種類数から説明していくと、日本では過去、めったにみられない珍しい種類も含めて、約570種類が確認されている。次に奈良県内での観察種類は日本野鳥の会の奈良支部が正式に記録をつけており、それによると現在238種類で、日本全体種の半分に満たないといったところである。そこで、民俗公園での記録だが、表にあるように、全種72種類は1998年1月から2008年12月までの丸11年間の全観察種類数であり、表内の総合計覧の数は、その11年間の観察総数である。

さて、この種類数が多いか少ないかの基準であるが、他の県内の主要な野鳥生息地と比較してみよう。奈良公園内での記録数が94種類、平城宮跡(水上池を含む)での99種類といったところで、民俗公園に比べれば25種ほど多いという結果になっているが、これは奈良公園では春日山原始林が控えており、森林性の鳥が多いこと、平城宮跡では濠等の水辺の鳥がよく観察されることの差であろう。

渡り区分による観察数

ご承知の通り、野鳥が他の生物と異なる最大の特徴は、羽毛があることと空が飛べることである。その能力を生かして、野鳥のある種類は「渡り」を行うことで種の存続をはかってきた。

ツバメに代表される東南アジア方面から渡ってきて日本で夏に繁殖する夏鳥、ハクチョウに代表される寒いシベリア地方をさけて日本で越冬する冬鳥、日本では繁殖しないがシギやチドリのように、春と秋に繁殖地と越冬地を行き来するのに日本に一時滞

在する通過鳥、そしてスズメやメジロに代表される年中ほぼ同じ所に生息する留鳥(りゅうちょう)と渡りの区分からこの4つに区分される。

表では留鳥・冬鳥・夏鳥・通過鳥の順に観察数の多い順から並べ、図1ではその区分をわかりやすくするために円グラフにしている。それによると、種類、数ともに圧倒的に多いのが留鳥である。スズメ・ヒヨドリ・メジロといった日頃目にとまる機会の多い野鳥が上位を占めている。次に多いのが冬鳥で、ツグミ・ニュウナイスズメ・アトリ・シロハラ・アオジ等で、その内のニュウナイスズメ・アトリは季節的に観

表 11年間観察野鳥総数

No	種類	渡り	総合計
1	スズメ	留鳥	3596
2	ヒヨドリ	留鳥	2168
3	メジロ	留鳥	1918
4	エナガ	留鳥	881
5	ムクドリ	留鳥	642
6	ハシボトガラス	留鳥	546
7	カワラヒラ	留鳥	544
8	シジュウカラ	留鳥	461
9	キジバト	留鳥	439
10	ハシボソガラス	留鳥	423
11	ホオジロ	留鳥	333
12	イカル	留鳥	306
13	コゲラ	留鳥	271
14	モズ	留鳥	221
15	ウグイス	留鳥	196
16	ヤマガラ	留鳥	183
17	アオサギ	留鳥	141
18	セグロセキレイ	留鳥	98
19	カワウ	留鳥	77
20	コジュケイ	留鳥	28
21	カルガモ	留鳥	26
22	キセキレイ	留鳥	22
23	コサギ	留鳥	15
24	ケリ	留鳥	15
25	オオタカ	留鳥	12
26	キジ	留鳥	7
27	カワセミ	留鳥	3
28	ゴイサギ	留鳥	1
29	トビ	留鳥	1
30	アカゲラ	留鳥	1
31	カケス	留鳥	1
小計			13576
1	ツグミ	冬鳥	834
2	ニュウナイスズメ	冬鳥	427
3	アトリ	冬鳥	198
4	シロハラ	冬鳥	191
5	アオジ	冬鳥	143
6	ビンズイ	冬鳥	130
7	ジョウビタキ	冬鳥	102
8	ハクセキレイ	冬鳥	81
9	ルリビタキ	冬鳥	34
10	カシラダカ	冬鳥	32
11	アオバト	冬鳥	23
12	シメ	冬鳥	21
13	ハイタカ	冬鳥	8
14	トラツグミ	冬鳥	7
15	コガモ	冬鳥	5
16	マガモ	冬鳥	4
17	ダイサギ	冬鳥	3
18	キクイタダキ	冬鳥	3
19	ウン	冬鳥	3
20	ミヤマホオジロ	冬鳥	2
21	クサシギ	冬鳥	1
22	タヒバリ	冬鳥	1
23	コルリ	冬鳥	1
24	ヒガラ	冬鳥	1
小計			2255
1	ツバメ	夏鳥	737
2	アマサギ	夏鳥	22
3	コシアカツバメ	夏鳥	21
4	オオヨシキリ	夏鳥	9
5	ホトトギス	夏鳥	7
6	チュウサギ	夏鳥	5
7	セツカ	夏鳥	4
8	キビタキ	夏鳥	3
小計			808
1	マヒワ	通過	35
2	エゾビタキ	通過	6
3	コサメビタキ	通過	6
4	センダイムシクイ	通過	6
5	アマツバメ	通過	4
6	イワツバメ	通過	3
7	サンショウクイ	通過	2
8	メボソムシクイ	通過	1
9	アカハラ	通過	1
小計			64
合計			16703

※渡り区分は大和郡山市を中心とした場合

察数の変動が多くて一定しないが、他はほぼ冬中、民俗公園内の林地内に主に生息し、ここでゆっくりと餌をとって体力を蓄えて、春先繁殖地であるシベリア方面に帰って行く。

夏鳥については観察数は多いものの、この民俗公園内で確実に繁殖しているのはツバメくらいで、他は公園の外で繁殖したものが、夏期に園内に飛来し観察された例である。



図1 渡りによる区分

野鳥から見た民俗公園

図2に11年間に観察された種類ごとの観察数の多い順から円グラフを作っている。見やすいようにベスト10までと、それ以外はその他でくくっている。多い順からスズメ・ヒヨドリ・メジロ・エナガと留鳥がベスト4を占め、5番目に冬鳥のツグミが入っているように、この民俗公園の自然の特徴は、人家や農耕地に近い里山といったところだろうか。

それはスズメが一番であることからもうかがえるが、メジロが3番目に入っていることは、単に人家に近い里山ではなく、森林的要素も残されていることも示している。それはベスト10には入らなかったが、ウグイスが比較的観察されていることからわかる。

それと、この公園で観察例の多いシロハラ・アオジ・ビンズイ等の存在である。これらの種類は、冬中公園に滞在し一冬を過ごしている。園路から公園内の樹林地を観察してみればわかるとおり、高木があってその下の林床は比較的明るくて落ち葉が積もっている。これらの冬鳥は、そういう落ち葉の中から昆虫等を捕食しており、冬鳥にとっては過ごしやすい環境になっているようである。

珍しい鳥

冬鳥の覧にキクイダタキ3羽が観察されているが、これは2005年・2008年の記録で、調査開始時は観察

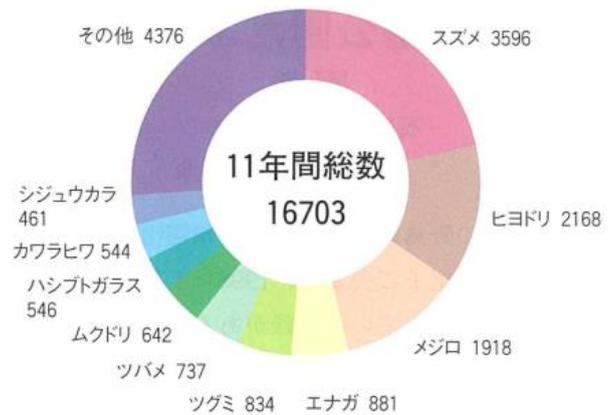


図2 観察数による区分

されなかったが、2005年になって初めて石尾さんが発見し、それがどういうルートでか大阪まで知れ渡り、連日超望遠のカメラを携えての野鳥愛好家の来訪が続くという騒ぎがあった。留鳥のオオタカの公園内での繁殖はないが、近くの森林での繁殖が始まったらしく、この調査においても2001年から毎年観察されるようになった。オオタカが奈良の里山でも増えているという情報があるが、それがこの長年のデータからも裏付けされる結果になっており、ここにおいても継続された調査の意義が浮かび上がってくる。石尾さんご夫妻は、引き続き公園の野鳥調査を継続中と聞いており、今後も民俗公園の野鳥の生息状況を把握するのに有意義なデータを提供してくれることを期待したい。



メジロ 撮影上山義之

(2004, 3, 9)



キクイダタキ 撮影上山義之

(2006, 1, 27)

奈良県立民俗博物館研究紀要・目録 (1~23号)

No.	発行年	論文名	執筆者
1	1977	奈良県吉野地方のトチ・カシ・ホソの食制	浦西 勉
		奈良晒布の織技的変遷	芳井敬郎
		龍神・水神祈願	松崎憲三
		中世興福寺荘園にみる水利慣行をめぐって	奥野義雄
		民俗博物館における収蔵資料の整理	大宮守人
2	1978	百万遍念仏についての一考察 -疫病神送りとしての数珠繰り-	松崎憲三
		仏教儀礼地方伝播過程の一考察 -奈良県宇陀郡宗祐寺(融通念仏宗)の場合-	浦西 勉
		百万遍念仏引声から百万遍数珠繰り念仏へ -民間念仏信仰としての展開過程の素描-	奥野義雄
		二つの木白 -民俗博物館収蔵品から-	大宮守人
		大和緋の技術	芳井敬郎
3	1979	民間紡織技術とその用具(1) -アサ・フジを中心として-	芳井敬郎
		フクマルムカエについて -その分布と行事の種々相-	松崎憲三
		大和の「オコナイ」についての覚書	浦西 勉
		仁王会と五大力菩薩についての覚書 -呪句・呪符としての五大力菩薩への起因究明のために-	奥野義雄
		檜木屋の製作用具	大宮守人
4	1980	節分と追儺の融合過程と呪術的要素について -中世民衆文化の創造の究明によせて-	奥野義雄
		江戸時代における百万遍念仏の伝承について	浦西 勉
		諸職に残る槍鉾について	大宮守人
		農村住宅変容の民俗学的考察 -奈良盆地一農家の事例により-	芳井敬郎
5	1981	地方における修正会(おこない考) -特に「荘厳」という言葉を中心に-	浦西 勉
		予祝儀礼・御田植と中世農民 -大田植と勸農の接点によせて-	奥野義雄
		県内御田植祭の詞章について	大宮守人
		奈良県下の水口祭の諸相覚書	徳田陽子
6	1982	古代中世の逆修について -逆修からみた中世民衆文化の創造によせて-	奥野義雄
		県内土白改造痕の比較研究	大宮守人
		地方に残る修正会「オコナイ」の構造 -奈良県下の場合-	浦西 勉
		農家の夜なべ仕事について -夜なべの地域的概要の覚書-	徳田陽子
		祈願絵馬寸論 -発生期の絵馬にみる二つの信仰形態によせて-	奥野義雄
7	1983	桜井市笠における宗教伝承の変遷	浦西 勉
		中世村落における祭祀組織・宮座についての素描 -大和にのこる宮座文書を中心に-	奥野義雄
		中世春日社本社神人の祭祀組織(1) -中世末の日常奉仕の一端-	大宮守人
		子供誕生における絵馬奉納について	徳田陽子
8	1984	中世逆修法にみる柿経の存在形態について -もう一つの柿経の存在を中心に-	奥野義雄
		当館収蔵織具の比較研究 -糸車-	大宮守人
		村落における神仏習合の伝承 -秋祭りの御供「ざくろ」の伝承を中心に-	浦西 勉
		副業としての薬仕事について -平群町の場合-	徳田陽子
		コビキノコギリとその職人	横山浩子
9	1985	大和の六齋念仏について -盆行事とかかわる六齋念仏講とその変遷を中心に-	奥野義雄
		村落の共同祈願祭における模擬用具について	大宮守人
		桜井市上ノ郷の神社成立の過程と祭礼 -「オコナイ」の成立と母体-	浦西 勉
		仕事着について	徳田陽子
		十九夜講について	横山浩子
10	1986	下駄と下駄職人について(1) -下駄の製作とその用具-	横山浩子
		出雲荘土帳にみる「綱掛」考 -桜井市江包・大西におけるオツナまつりの意味するもの-	浦西 勉
		中世の百萬遍念仏について -百萬遍念仏の画期と民衆化を中心に-	奥野義雄

No.	発行年	論文名	執筆者
11	1988	当館収蔵丸型行燈の比較研究	大宮守人
		地域社会と講 ー榎原市今井町を中心にー	横山浩子
		中世公家の盂蘭盆習俗をめぐって (その1)	奥野義雄
12	1990	当館収蔵の傾斜高機 ーいわゆる大和機についてー	横山浩子
		新たな収集資料に見る木臼の痕跡	大宮守人
		維新後の習俗禁止令史料にみる明治政府の民衆統制について	奥野義雄
13	1993	盂蘭盆以前の祖先祭祀習俗について	奥野義雄
		中世公家・武家の守庚申について	奥野義雄
		山村における祭礼の始源的形態 ー吉野郡川上村高原のホーエッサ行事 (祭礼) ー	浦西 勉
		大和の傾斜型高機 ー当館の収集資料からー	横山浩子
14	1995	門位牌の習俗について ー葬祭の物忌札習俗の展開過程によせてー	奥野義雄
		若水迎いの習俗について ーその原像と呪術性を中心にー	奥野義雄
15	1997	狐をめぐる伝承とその介在者について	奥野義雄
		奈良県東部の龍神伝説と水神信仰覚え書 ー猿沢池の龍神伝説をめぐってー	横山浩子
		「今昔物語集」に現れる鬼の群像 ー鬼の究明のための基礎作業を中心にー (その1)	奥野義雄
		応永廿五年三里条々規式等について ー斑鳩町服部神楽講文書の紹介としてー	大宮守人
16	1999	江戸幕府撰大和国絵図の現存状況と管見した図の性格について	磯永和貴
		特別陳列「江戸幕府撰元禄十二年大和国絵図」について ーその展示と写真収録ー	大宮守人
		奈良盆地の残存川舟について	大宮守人
		中世説話集に現われた鬼の群像 ー鬼の究明のための基礎作業によせて (その2) ー	奥野義雄
17	2000	村落社会に残るオコナイ (修正会) 行事の研究 (1)	浦西 勉
		ー江戸時代のオコナイ記録から試みた郷村的オコナイ行事の復元ー	
		禁制・禁令史料が語る徘徊する民間宗教者の社会的影響	奥野義雄
		ー古代から現代までの民間宗教者の存在形態の素描によせてー	
18	2001	民俗と浄土真宗の習合に関する覚書 ー吉野の山村と蓮如との交流にみるー	浦西 勉
		端午の節句にとまじない習俗	奥野義雄
		ー『諸国風俗問状答』にみる近世民衆のまじないに託した祈願を中心にー	
		節分の豆をめぐる習俗 ー『諸国風俗問状答』にみる節分の豆による疫鬼よけと厄払いを中心にー	奥野義雄
19	2002	奈良晒再考 ー麻織物という視点からみた奈良晒ー	横山浩子
		『諸国風俗問状答』に現れたまじない「掬拾掬拾」について	奥野義雄
		ー近世における怪我・災難除けから蝗の害を避ける呪符へ展開した符字ー	
		水口祭と牛王宝印札 ー近世における農耕儀礼としての水口祭と牛王宝印札にみるまじない習俗ー	奥野義雄
20	2004	当館のコレクション化事業と染織及びその関連用具の調査・研究	横山浩子
		竹箴製作に関する資料と製作の試み	山田和夫 金城弥生
21	2005	木地屋の系譜と漂泊 ー近世・近代における吉野の轆轤師と杓子屋ー	森本仙介
		奈良県内における馬鍬の形態的な特徴	岩宮隆司
		奈良県立民俗博物館のデジタルデータベースの構築について	大宮守人 中上哲也
22	2006	奈良県内における長床掣の形態的な特徴	岩宮隆司
		吉野地域の民俗資料におけるコレクション化の意義	森本仙介
		ー「吉野の山村生産・生活用具」の再編成と地域別コレクションの構築ー	
		博物館とデータベース	中上哲也
		[資料紹介] 民俗資料の中にみられる「茶臼」について ー当館の収集資料からー	横山浩子
23	2008	重要有形民俗文化財「吉野林業用具と林産加工用具」の概要	森本仙介
		奈良県内における中床掣の形態的な特徴	岩宮隆司
		郡山・矢田民俗誌のために (1)	鹿谷 勲

みんなく春夏秋冬

平成20年度の活動

【展示】

- ◎4月26日～8月24日
シリーズ展民具は語るⅤ「台所の民具」
- ◎9月20日～11月24日
特別展「衣の昔ーおばあちゃんが子どもだったころー」
- ◎7月26日～9月28日 特別陳列（新収蔵）
「奈良茶碗コレクション」
- ◎12月13日～2月1日 シリーズ展民具は語るⅥ
「家具・調度ー住まいの民具ー」
- ◎2月28日～4月5日 季節展「ひなまつり」

【コーナー展示】

館内企画展示場入口や通路の展示ケースを利用して、季節や展示に関わるコーナー展示を実施。

【玄関ロビー展】

- ◎5月31日～6月29日
田中真人・民俗写真展「大和郡山の祭りと行事」
(5/31 写真解説 田中真人氏)
- ◎8月2日～8月10日
みんなくひょうたん展（協力京阪奈愛瓢会）

【催し物】

- ・5月18日（日）民俗映像上映会「大和の野神行事」
- ・6月8日（日）国際博物館の日記念講演会
「時空を越えて、歴史的民家保存の意義と方法論ー大和民俗公園の未来を考えるー」（講師：奈良文化財研究所建造物研究室長 窪寺茂氏）
*概要は民俗博物館だより100号（前号）に掲載
- ・7月13日（日）普及講座・なら民博の活用術
「回想法での民具の使い方」（講師：健康運動指導士 永田操氏）回想法講座の第3回目。民具の使い方を回想法の実際に則して総括的に検討。
- ・8月31日（日）夏休み「奈良の昔話」上映会
夏休みの子供向けに「お田引いたん見たかえ」「子育てゆうれい」他を上映。
- ・9月28日（日）民俗映像上映会
「菅原神社の秋祭り」「鼻緒づくり」（ともに当館制作映像記録の公開）
- ・11月23日（日）関西文化の日記念講演会
「地域文化と博物館」
（講師：当館運営協議会会長植木行宣氏）
- ・12月14日（日）体験学習「しめなわ作り」
恒例の年末しめなわ作り、吉岡秀信氏指導。
- ・2月15日（日）民俗映像上映会
「秦峰一がとらえた大和の自然と風土」大和郡山市在住の秦峰一氏の記録映像公開（第4回）。「金魚出生」

「あげは蝶」「蝶歳時記」を上映。

- ・3月1日（日）「体験 南阿田の流し糰づくり」
五條市南阿田に伝わる三月節供の風習を学び、流し糰づくりを体験。
- ・3月3日～3月8日「民家で味わうひなまつり体験とお茶席」
旧臼井家住宅にお雛様を飾り、普段上がれない座敷にのぼって、民家での雛祭りを体験。お茶席は3/8のみ。

【博物館実習等】

- ・博物館実習（見学実習）として、5/23天理大（31名）、6/22奈良大（36名）、10/25龍谷大（44名）、11/15京都文教大（44名）を受け入れ。
- ・学校教育の場に博物館資料を生かす試みとして、高校等の授業を受け入れ。当館学芸員が解説。5/16法隆寺国際高校（22名）、10/23同高校（41名）、3/21直江津中学校（21名）
- ・西の京高校地域創生コース「観光学入門」の一環で12月3日「春日若宮おん祭り」の授業に当館学芸員を派遣。

【その他】

- ・11月12日（水）ACCU・ユネスコ青年交流信託基金事業「文化遺産保護青年指導者研修・交流プログラム」によるアジア太平洋地域の文化財保護に関わる青年指導者研修生10名を迎え、奈良県の無形遺産保護の概要の講義と特別展の解説、さらに民家でのカマド炊きごはんでおにぎり体験。（4年目）

【公園】

- ・ひょうたん・ささゆりなどの栽培
- ・梅の木ファミリー 4/20・6/8・7/6・8/17・9/21草刈り、6/15摘果、10/26親睦会、12/3剪定講習会、3/14総会
- ・「花の谷」の整備 11～3月、県とNPO法人との協働事業として取り組み開始（「地域にぎわい創出事業」）

【職員異動】

- ・平成21年3月31日付け 藪 茂次長 異動
- ・同 4月1日付け 鈴木節子次長 新任

平成21年度の活動報告

【展示】

- ◎4月25日～8月23日 シリーズ展民具は語るⅦ
「除草機が語る近代農業革命」
- ◎9月19日～11月23日 特別展「農具に見る古代の息吹ー奈良県の牛耕用具特別公開ー」
- ◎12月12日～1月31日
シリーズ展民具は語るⅧ
「山の仕事にみる伝統技法」



- ◎2月27日～4月4日 季節展「ひなまつり」
- ◎7月25日～9月13日「涼しさを呼ぶ奈良茶碗」

【コーナー展示】

館内企画展示場入口や通路の展示ケースを利用して、季節や展示に関わるコーナー展示を実施。

- 3月～4月「化粧用具と結髪具」
- 4月～7月「大和がすり」
- 7月～9月「奈良団扇（うちわ）」
- 9月～12月「牛にまつわる民具」
- 1月～3月「吉野山地の樹木」

【玄関ロビー展】

- ◎5月2日～6月14日

野本暉房・民俗写真展「大和のオンダと野神行事」
(5/2写真解説野本暉房氏)

- ◎9月13日～9月27日

みんなくひょうたん展（協力京阪奈愛瓢会）9/19、20にはひょうたんの絵付け講習会を実施。また期間中ひょうたんクイズを実施して、27日に結果発表。

- ◎7月18日～8月30日

写真パネル展「大和民俗公園の野鳥と昆虫」
奈良市在住の鳥田和男氏と夫人がほぼ毎日来園して、撮影した民俗公園内の野鳥・昆虫・小動物の写真展。

- ◎10月24日～11月29日

田中真人・民俗写真展「大和郡山の祭りと行事(2)」
(10/24写真解説田中真人氏)

【催し物】

- ・5月10日（日）民俗映像上映とミニシンポジウム「大和の野神信仰」
「大和の野神行事」の上映と野本暉房・樽井由紀・鹿谷勲によるミニシンポジウム。
- ・5月16日（土）国際博物館の日記念講演会「民俗・民具からまなぶ—こどもと博物館をつなぐ試み—」（講師：大和郡山市立治道小学校長恒岡宗司氏）
- ・6月6日（土）民俗映像上映会「竹箕づくり」（当館制作映像記録・初公開）
- ・6月7日（日）第1回みんなくコンサート「古民家で聴く音頭と三味線の音」
旧白井家住宅東の広場にて、江州音頭・河内音頭・奈良の民謡と津軽三味線を披露。出演は三門会（三門忠博）・大和茜会（富本栄一）・秋篠いなば会（稲葉ひろ子）



- ・11月1日（日）第2回みんなくコンサート「古民家で聴く懐かしのオールディーズ」
旧白井家住宅とその前の広場にて梅野浩二とwoops（ウープス）が懐かしのエレキサウンドを披露。

- ・11月23日（月・祝）関西文化の日記念講演会「農具にみる古代の息吹—奈良県の牛耕用具—」（講師：神奈川大学名誉教授河野通明氏）
- ・12月13日（日）体験学習「しめなわ作り」
恒例の年末しめなわ作り。吉岡秀信氏指導で実施。
- ・2月14日（日）民俗映像上映会「秦峰一がとらえた大和の祭り」秦峰一氏制作の記録映像公開（第5回）「火祭讃歌」・「大和祭考」を上映。

【博物館実習等】

- ・博物館実習（見学実習）として、4/25近畿大（34名）、5/16近畿大（32名）、6/13近畿大（33名）、10/21広島女学院大（32名）、10/24龍谷大（39名）を受入。
- ・学校教育の場に博物館資料を生かす試みとして、県内高校の授業を受け入れ。5/8法隆寺国際高校（42名）。
- ・西の京高校地域創生コース「観光学入門」の一環で12月3日「春日若宮おん祭り」の授業に講師派遣。

【その他】

- ・6月24日（水）ACCU・ユネスコ青年交流信託基金事業「文化遺産保護青年指導者研修・交流プログラム」によるアジア太平洋地域の文化財保護に関わる青年指導者研修生10名を迎え、当館における民具収集の意義についての講義と特別展の解説、さらに民家での茶粥体験。（5年目）

【公園】

- ・ひょうたん・ささゆり等の栽培
- ・梅の木ファミリー 4/19・7/5・8/16・9/27・10/18
草刈り、6/7摘果、12/15剪定講習会
- ・「花の谷」の整備 4月～9月 花の谷を整備し、ホテルの棲む環境をめざす県とNPO法人の協働事業。

【平成22年3月以降の予定】

- 季節展「ひなまつり—一人形たちの宴—」（2/27～4/4）
- ひなまつり体験（2/20～3/7）民俗公園の民家でひなまつりを楽しむ企画。

奈良県立民俗博物館だより Vol.36 NO.1 (通巻101号)

2010（平成22）年3月1日発行
編集発行 奈良県立民俗博物館
〒639-1058 大和郡山市矢田町545番地
TEL 0743-53-3171 / FAX0743-53-3173
印刷 共同精版印刷株式会社
〒630-8013 奈良市三条大路2丁目2-6

奈良県立民俗博物館

開館時間：午前9時～午後5時（入館受付は午後4時30分まで）
※民俗公園内の民家集落は午後4時まで
休館日：月曜日（休日にあたる場合は翌日に振替）
年末年始（12月28日～1月4日）
観覧料：大人200円 大・高生150円 中・小生70円
※20名以上、団体割引あり
※65才以上、身障者と付添1名は無料
交通案内：近鉄郡山駅→奈良交通バス①のりば→「矢田東山」下車
→北へ徒歩10分／公園・博物館利用者専用駐車場あり